

毎月一回 15日発行昭和48年8月15日発行・第44号 (昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

8月号



Libertaire Vol. IV, No 9

無政府主義者の機関紙

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年8月15日発行 Vol. IV, No 9

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナリズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。

それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナリズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立つて、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナリスト（リベルテール）のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変りはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう（三浦）

目次

何がアナリズムか	1	B・アルマン	1
ルドルフ・ロッカー			
メキシコ日より		山本アントン	8
書評「神もなく主人もなく」上	三浦精一		10
野火			17

アナリズムとは
何がアナリズムなのか

1. 現実の社会

混沌とした存在、行為、それに観念。無秩序で、苛烈で、仮借のない闘争、永遠の虚構。今日は絶頂にあるものを明日は容赦もなく粉碎して盲目的に廻転する転輪。数々の心象、それらは現実の社会のあるがままを描くことができるだろう。だが、たとえ社会がみずから描いたとしてもだ。画家たちのもつと偉大な画筆や、作家たちのもつと雄大なペンも、喧騒や、欲望、意欲、憎悪そして誠実などといった、人々が割当てられているいろいろなカテゴリーの中で衝突し、いり混じっているものの衝撃を現わす乱闘の遠い反響を伝えるために用いられるとしたら、ガラスのように割れるだろう。

いつの日か、誰が個々の利害と集団の必要とが、個人の感情と全体の論理とが交錯する、はてしない戦いを正確に表明するだろうか。このすべてが現実の社会を構成し、またこのすべてがその現実の社会を描くには不十分なのだ。生産させ、消費させる権利、すなわち各種各様のあらゆる形式のもとに、不動産または動産、機器資本

B・アルマン

および金銭資本、教授資本と教育資本といったものをもとにして、寄生的権利で存在する可能性を少数者が占有している。

これに対して、その腕、その頭脳その他の生産的器関の外には何も持たない膨大な大衆は、餓死しないためのものを得るためにはばかりでなく、所有権や交換価値の少数独占者が借しげもなく多少とも贅沢に生活することができるために、貸したり、賃貸したり、売淫したりせざるを得ないのである。大衆は、富めるも貧しきも、一方ではその中に自分たちの利益を見出し、他方では無知の中に沈んでその中から出ようとしないうために、昔ながらの伝統的偏見に隷属している。この大衆の祭儀は金銭で、成金の原型である。大きな悪徳も、大きな徳もでない凡愚の政治だ。天から墮落し、地下においても墮落し、深遠な希望もなく、逸楽と安楽の地位に達するといふ以外には目的もない群集は、必要ならば昨日の友が今日は踏みつけにされるのを、くだかれるままに見すてる。絶えず決定的事象に変化するやも知れない仮象、そし

て結局仮象でしかないという心配のある決定的事象。生活、それは誇示された信念や、見当ちがいの野望の跳躍台につかわれる確信に背を向ける。聖職者たちや唯物論の粗雑さを暴露する信者たち以上に聖職至上主義者である自由思想家たち。浅薄なものが深遠なものとして通用することを望み、深遠なものがまともに受けとられるにはいたらない。こうしたすべてを繰返すこと、それは誰一人として反論するものがない社会の活きた画である。しかし、反論しないのはその絵が現実のはるか下底にあるに過ぎないことを考え得る人ではない。何故だ。それその顔面には仮面を被っているからだ。誰も存在することを心にとめていないからだ。すべてのものが顕示することだけを熱望するからだ。A 顕示するV、ここに最高の理想がある。そして安楽と富とがこのように貪欲に求められるとしたら、これは顕示することができるとある。現時においては金銭だけがメーキャップすることを可能にするからである。

この偏執、この熱情、この外観への、この外観を得させるものへの競争、それは浮浪者のように最高の富をむさぼり、文盲のように最高の教養を食いつぶす。職長を悪く言う労働者は自分では職長になることを願う。自分の商業的名譽を比類のない価値に評価する商人は見

した疾患が豊富にある。顕示する！顕示する！——純粹性、無私無欲、寛大が空虚な贅言だと考えられるとしても——正直、徳、道徳性が、そうしたものを言い表わす人々のもっともささやかな慰安であるとしても、純粹らしく、無私無欲らしく、寛大らしく、顕示する。

腐敗をまぬかれ、顕示せぬことを認める人が、どこに在るだろうか。そんな人にいまだかつて会ったことはないかと主張するつもりはない。われわれは眞実な人・本當に眞実な人はまれたと確認できる。われわれは無私無欲に働らく人は限られていると断言する。是非は別として私は口に壮大な言葉をひびかせ、しかも不幸な人々を偽購する搾取の上に財を築き上げる自由主義ブルジョアや博愛家よりも、他のために人生を送りたいと思うことを冷笑的に告白する人の方を尊敬する。

人は反論するだろう。われわれがわれわれの怒りに引きずられているのだ。何よりもまず、われわれの怒り、あるいはわれわれの嘲罵は、それ自身が顕示する態度ではないのかと。気をつけてくれ。ここに見られるものは、これは観察なのだ。意見なのだ。題目なのだ。それらの価値について決めるのは読者だ。以下に続くページも無謬性の印章がおしてあるのではない。われわれは誰でもらうとその人をわれわれの観点に転向させようとはしな

すぼらしい取引には見向きもしない。愛国的国粹的選挙委員会の一員である小商店主が自分の利益になると見たりすぐ外国工場に注文を出す。都市の臭い地域にすし詰りめになっている貧しいプロレタリアの弁護人である社会主義代議士は空が開け空気の豊かな清い都市の楽な人たちの住んでいる所の大邸宅の居住者である。自由思想家が今だに自ら進んで教会に結ばれ、しばしば教会で子供たちを受洗させている。宗教人はあえて自説を公表しない。宗教を笑うものにする傾向があるからだ。では眞実はどこにあるのだ。いたるところに社会的疾患が広がっている。われわれは家族の中でそれに出会うのだ。そこでしばしば父、母、子供たちがたがいに憎み会っている。皆がたがいに愛しあっていると言いながら、特に皆がおたがいに愛着を感じていることを信じさせながら、欺き合っている。われわれはそれを、うまく行かない夫と妻が、あえて彼らをむすぶ絆を断ち切ることもせず裏切り合っている夫婦の間の事に見るのである。同じ疾病は集団の中にも広がっている。そこでは各自が、自分の仲間を、もう自分たちの利益を引き出すことができないう時、その地位に上ろうとして、主宰者、秘書または經理の裁量で取替えようとする。献身的行為、輝かしい功蹟、の中に、私的会話の中にも、公式演説の中にもこう

い。われわれの目的は、これを読む者に容認するかまたは彼等自身の概念と合わないものを拒絶するかを反省させるようにみちびくことにある。

人はまたさらに反論するだろう。これは非常に高度な問題が、すなわち形而上学的観点で扱われている。もっと具体的な現実の場に下らねばならない。現実は、ここにある。それはすなわち現在の社会が多分いろいろに出発した長い歴史的過程の結果だということである。人間すなわち、さまざまな人間たちは、ただ単純に彼等の道を求めたり、ととのえたりしている。人間たちは模索したり、つまづいたり、道に迷ったり、見つけ出したり、進んだり、引き返したりだ。——危機にあって人間たちはしばしば根底からゆり動かされる。運命の路に引きずられ、投げ出され、歩をゆるめたり、その場で拍子をとったり。現代文明の磨かれた、塗り立てられた、表面を少しばかり引騒きながら、片言や児童戯や史前の迷信をさらけ出すのだ。

誰がこれを否定するか。われわれはこうしたすべてがA人間の問題Vを、複雑にしてみようということも是認する。

最後に、これも反論するだろう。環境の中で溺れ、その中に吸いこまれていく個人の責任を見出したり、確定

しようとするものは馬鹿らしいことだ。彼の思惟は、そして彼の挙動は、彼を取りまいてゐるもの思惟や挙動の反映である。——もし社会の階層の上から下まで、切望していることがA頭示するVとで、A存在するVことでないとしたら、その罪は總体的進化の現段階にあるので、社会の一員であり、恐ろしく大きな集合体の中の微小な原子である個人にあるのではない。

われわれは正直に答えよう。われわれは社会を構成するすべての存在に対して書くことは望めない。理解してもらいたいのだ。われわれはA考える人たちVに対して、すなわちA現に考えている人たちVに対して語りかけるのだ。繰返して言うのだ。——考えることもできず、考えようとも思わない多数者に期待せざるを得ないことにじりじりしている人たちに対して——外観に順応できない人たちに対し、また總体的進化の現段階が気に食わない人たちに対して語りかけ、繰返さすのだ。われわれは好事家、思想家、批評家に対して——議論を許さない公式や間に合わせの解決に満足しない人たちに対して——書くのだ。

二つに一つだ。すなわち、避けることのできない進化がゆっくりと継続するままにするほかはないし、情況の前に無気力に頭を下げることに、辛抱強く最善の社会の中

ですべてが好くなるのを期待して、出来事の隘路に受動的に参加し、容認すること以外にはないのだ。——われわれの提題やわれわれの意見は、こうした見方に同調する人たちの関心を引くものではない。——さもなければ、誇張された楽観主義に身をかためないで、大きな路線をはなれて、しばらくの間高所に退くこともできる。自身自身の不安の根源を自問し、探ってゆくこともできる。われわれは現実の社会が満足なものではないことを——

——現実の生活、現実の活動に飢え渴いていて、自分たちの周囲には技巧的な非現実的なものしか見られない人たちに語りかけるのだ。調和を破られ、何故自分たちの周囲に無秩序や兄弟殺しの闘争があふれているのかと自問する人たちに話すのだ。彼等は多分これらのページの行間に彼等の苦悶に対する回答を見出すだろう。

結論しよう。人間や物について注意深く反省し考慮する精神は、社会と呼ばれる總体的事実の中に、自由な、独立の、個人的な、現実の生活において、ほとんど越えることのできない障壁に出会うのだ。彼がそれを悪と呼び、その消滅を願うためには、それで十分だ。(第一部 現実の社会の項終り。第二部 アナルシズムと社会、第三部 アナルシズムと社会改良家は次号。三浦訳)

今月号から数回にわたって分載して訳出する「ルドルフ・ロッカー」は、「時代精神」誌(第二一号)に掲載されたものである。同誌はロッカー生誕一〇〇年記念としてこの論文のために全スペースを割き、例のヌーシーが序文を寄せている。ロッカーについてはいくつかの小論文がすでに訳出されているだけでなく、約半世紀にわたって日本のアナキストの間で著名であり、現実交友関係もかなりあったようである。ただ残念なことに大著「ナシヨナリズムと国家」「アメリカの自由のバイオニア」「アナキズムと組織」はまだ紹介されていない。(訳者)

ルドルフ・ロッカー

(一八七三—一九五八)

警告者と告知者 闘士と革命家

ルドルフ・ロッカーは一八七三年三月二五日にメインツで生まれた。当時メインツは典型的な軍事、行政都市であって、すぐれた数百年の歴史をもっており、印刷術を発明した都市である。メインツはヨハン・ゲンスフライシュがヨハン・フストとペーター・シェッファーとともにグーテンベルクのために印刷された言葉を全世界に拡大することを確実なものとした共同体である。しかし、それだけでなく、この歴史的に重要な都市は最高度のリパタリアンの伝統をもつ版図にある。美しい風景と商業にとって南ドイツ地方の千年来の開放性とはそのことをきわだたせている。明敏と商業とはメインツの住民の

気質と文化的開放性のための強烈な浮力である。マチアス・グリェンワルト、ハンス・ホルバイン、アルブレヒト・デューラー、フェイト・シュトス、ティエール・リーマンシュナイダーといった古いドイツの多数の芸術家はこうした情熱と結びついている。当地では、上に名前をあげた画家や彫刻家以外にもなお他の世界的なものが不朽の傑作を創造した。アカデミーや大学を早期に創造したことも数百年にわたって衝動にかられた探求精神を刻印しているのだ。公共業務のための広範な開放性の伝統によって南ドイツの土地とそこの人間の肖像が完成されるのであるが、その基盤は都市憲法と都市管理の中世

的な生活にある。この地方で人文主義は文化の眞の担い手であり、その要素でさえある。

このように、人間とその精神的な表現が進歩の不断の流れに傾きつつけるとき、そのことは全く自明なことである。だから、南ドイツ領域の人間は人間の権利を宣言した大フランス革命の思想、古い制限的な法形式を破壊したナポレオンの征服という大革命につづく時代をも開放的な意向で受け入れていた。そして当地では、一八四八年と四九年の革命時代の多くの思考が進歩的なヨーロッパの社会的、政治的諸理念と関連していた。

ルドルフ・ロッカーの人格を評するに際しては、人文主義文化が最高度に作用している地域の出身であることがきわめて重要であると私には思われる。ロッカーが生涯の大部分を故郷ではなく、諸外国で故郷から遠く離れて過ごしたという事情はこのことを否定するものではない。人間は誕生のときから多くの素質と能力をもちあわせている。環境がこうした素質や能力に助長的に作用するとき、それらはますます多様で、重要なものになるであろう。だが、ロッカーの場合にこのことはきわめて適合することとなったのである。

コスモポリタン

の社会理念に寄せられていた。しかし、それ以外にもなおロッカーの社会主義的教説にすぐれた母体を提供する豊富な社会批評家と社会変革家がいる。ドイツ人のモーゼス・ヘスやカール・グリュンがそうであり、わけても重要なことに、知的な仕立職人のヴィルヘルム・ワイトリングがそうである。自由の調和についてのワイトリングの著作は数十年にわたって社会主義には討論の基礎であった。しかし、イギリスの社会批評家ロバート・オーエン、イギリスの社会革命家ウィリアム・ゴドウィンの思想もロッカーの青春期の社会主義的観念の世界においてはなおきわめて生き生きとしている。ブランキストやカペー主義者の国家社会主義や独断的な諸教説、ならびに、カール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスの全体主義的諸教説、フェルディナンド・ラッサールの完全なる国家崇拜は、この時代に社会主義理念をけっして魅了してはいなかった。相も変わらず、偉大なロシア人、ミハイル・バクーニンとアレクサンダー・ゲルツェンの諸教説が社会主義的観念の世界において、非常に強い程度で普遍的なのである。

けれども、すべての社会批判の鋭さと社会革命の苛酷さにあたっては、あたたかい人間性がこれらの諸理念からわき出ている。これらの諸理念は、ロッカーがそれら

ロッカーはさまざまな特別の生活環境を通じてコスモポリタンになった。彼はすでに若い頃に、人文主義的精神態度の文献上の産物に心を寄せていた。そして、まさにここにおいて、彼の出身州の文化遺産が、私たちが彼について知り、愛し、崇拝するようになったコスモポリタンティズムへの途上における最も重要な要素である。ということが証明されるのである。

若いロッカーはドイツとヨーロッパの巨匠たちの研究から早期に該博な教養を獲得する。しかし、彼は世界と世界現象の単なる文献的観察に満足しない。彼は、たゆむことなき精神をもって、獲得した人文主義的教養の結果を人間生活についての観察へと転化する。ロッカーは文献上の人間と、彼が出合い、人間存在という未解決のなぞと実際の人間実存との間に区別を設けることをここでごく若い頃に学んだ社会体 *Socialwesen* とを調和させている。このことは彼にとり精神的な作業の最も重要な分野となる。人間とその社会的諸関係が彼を呪縛する。だから、彼がごく若い頃にすでに社会主義の活気ある理念に精通しているのは驚くべきことではない。彼の精神的な関心は、とりわけ、古い学派の社会主義、アンリ・ド・サン・シモン伯爵およびシャルル・フリーエやビエール・ブルードンといった他の偉大なフランス人

を生来的に身につけていたように、人文主義的精神文化の偉大な伝統に結びついている。だから、インタナショナルイズムも、人間観察や人間の社会との関連とともに、古い社会主義者の諸理念に内在しているのだ。インタナショナルイズムは人間性の原則、個体の権利と尊厳から生ずる。それは社会に対する個人の譲渡しえない、独立した諸権利から生じ、展開するのであるが、共通した基盤においては個人の権利および個人の主張と社会の組織および社会の必要性とを結合させもする。

社会主義的観念の世界のインタナショナルイズムは、ロッカーの場合、必然的にコスモポリタンティズムになる。なぜなら、根底において、このインタナショナルイズムにあっては国家の境界内の諸国民間の調節だけでなく、ドイツ人、イギリス人、フランス人の利害を忘れない超国民的、脱国家的な諸関係も、そして単に人間も重要なのであるからである。かくして、ルドルフ・ロッカーのコスモポリタンティズムは二つの根底に起因する。一方は伝統的な人文主義的文化の分野に由来するものに根ざし、他方は人類の保全、保護、増加に役立つものを現実の人間文化とみなす社会主義的観念の世界に起因する。

ロッカーの場合、なぜこの文化の原則が最後には全人格に刻印することとなっているか、は不思議に思えない。